
真っ赤な蝶のご主人様

蜂蜜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真つ赤な蝶のご主人様

【Nコード】

N6092I

【作者名】

蜂蜜

【あらすじ】

大きな屋敷、たくさんのお金、そして権力。それら全てを持ち合わせた少女アカ。彼女は人間という域を超えて、魔界から持ってきた化学薬品で世界を支配しようとする。そんなときに彼女の前に現れた慎吾。彼らの運命は……？

アカ

綺麗な湖。そこを飛び回るのは、鳥ではなく真つ赤な蝶。

よく見るとその蝶は、羽に骸骨の模様がある。そして頭部についている触角には真つ赤な液体がついていた。蝶が急降下するたびにその液体は空中へ飛び散った。

フワフワと、そして気品を感じさせるその蝶には、ほかの蝶にはない能力がある。

それは、人を殺すこと。

長くとがった触角で、人間の脳を突き刺せば人はすぐに死んでしまふ。

その見るもおぞましい蝶を飼っているのが、この国最強の人間（？）、黒川アカ。彼女は使っても使い切れないほどのお金を所有し、全員の名前を覚えるのは不可能だと思えるぐらいの召使をもっていた。彼女は13歳にしてこの世を支配できるぐらいの権力を持ち合わせていた。

2

湖を取り巻くのは、大きな森。見渡す限り木、木、木。

ただ、不自然なことがある。それは、動物がいないのだ。

林へ足を踏み入れても、虫一匹見つけられない。森の奥深くを見渡しても、鹿や鳥なども全くいない。もちろん、湖の透き通った水の中さえも。

ここに存在することが出来るのは、ここを所有する人物とその人物が許可した物だけ。

その人物が、「黒川アカ」。

いつもは蝶もいないのだが、今日は1匹楽しそうに飛んでいる。
……人の血液を散らしながら。

そして……

「ああ、リールルいたの？」

小さな体の少女が湖の上を歩いてきた。

リールルというのは、その蝶の種類名らしい。

リールルはさつきまで飛んでいた場所を離れ、主人の元にやってきた。そして、主人、もといアカの肩に乗った。

アカの髪は黒く、ところどころに茶髪が混じっていた。見れば見るほど現代風だ。ピンクのフリルつきのワンピースを着て、足もピンのハイヒールで隠されている。

「リールル、聞きなさいよ。今の学校って面白くないのね。私が高校生の頃は中学生って言うのはもつと自由だったのよ？」

見た目に似合わず大人びた口調をしている。そして不自然な点が一つ。彼女の口からは、いつも年上の面から見ての感想が出る。

のちのち説明するが、それはあとにしておこう。

リールルがアカの肩を離れ、頭上を舞った。

アカもリールルが自分の肩から離れたことに気づき、上を見る。

そこは、太陽が出ているのに星が見えるという不思議な空だった。よく見ると、その太陽や星は天上から紐のようなもので吊るされている。作り物のように見えて、本物というメルヘンチックな天上界。

「リールル、あなたまた人を殺したの？ 酷い臭いよ」

リールルは嬉しそうにパタパタと舞う。

どうやら、ものの匂いや、音で世界を見ているらしい。リールルの触覚に血液がついていることに今気付いたようだ。

彼女は目が見えない。とでも言っておこう。

そして、蝶はより高く、より美しく舞った。まるで、主人に美しさを認めてもらいたいかのように。

だが、アカは何も見えていない。空気を切り裂くリールルの羽の音が聞こえるだけ。

無駄だとわかっているリールルだが、一向にその行為をやめよう

としない。

「リールル、今日はもう帰りましょ。“家”に。もうすぐママが帰ってきちゃう」

リールルは動きを止め、再びアカの肩にとまった。

アカはもときた方向を向き、再度足をすすめる。

目指す場所は、この空間の唯一の出入り口。

そこは生い茂った樹のつるや、草に囲まれた大きな門。まるで、どこかの洋館の門のようだ。

アカは前に手を出して、手探りでその門の取っ手を探した。

ふいに鉄の塊に触れた。

あった。

アカが手に取った取っ手は恐々とした髑髏の形。

アカは取っ手を思い切り引く。ギイイイイイ、という大きな音を出して門が開いた。

振動が地面を伝わり、足が震えた。

人ひとり、ましてや少女ひとりであけるのは無理なほど大きく、重そうな門。アカは軽々とあけた。

「ああ、また宿題がたくさんあるわ。リールル手伝って」

リールルは答えるかのように 実際答えていたのだが
アカの頬に羽を当てた。

アカはずかずかと、その門の中へ入っていった。

教室

東京から少し離れたどこか小さな町。

その人達はみな穏やかで、優しく思いやりのある人達ばかりだった。

その町は、ビルが少々あり、人口はあまり多くなくどちらかと言えば、町の広さの割には少なくらいだった。

そして、今日その小さな町の学校に転校生が来る。

中学校の情報が早い少年達は、その噂をもつ数日前から学校中に流していた。

そして、転校生が来る瞬間。

1年C組のドアが勢いよく開いた。生徒全員の注目が集まる。

先生だけがにこやかし、他の生徒はニヤニヤ笑ったり、嫌そうな顔をした。

それもそうだろう。転校生……いや、アカは普通の子よりも小さい。パツと見れば小学生に見える。

アカは生徒達にそう見られていても分からずに、手探りで壁や机を探し当て躓くことなく先生の隣へいった。

その行動を見て、生徒達はなんとなく理解した。彼女の目は何も映せないのだと。

先生は、アカの事について話し始めた。

「黒川アカさんは、今日からこの1-Cでともに過ごすことになった仲間だ。みんな仲良くするように。それと、アカさんは目が見えないためみんなもそこらへんは気遣ってあげるように」

「はい」と無気力な返事がぱらぱらと返ってきた。

アカは真つ暗な世界をただ見つめていた。自分の目の前で人の話し声が聞こえる。姿かたちは見えないのに音声だけ聞こえるという変な感じ。アカは目が見えなくなったとき、その不安でいっぱいだ

った。

休み時間。アカはたくさんのお話し声に囲まれた。

「どこから来たの?」「今はどこに住んでるの?」「前はどんな学校?」

そんな意味もないような質問をたくさんされた。

そのたびにアカは面倒くさそうに答えた。

その質問タイムが終わったのは次の授業が始まる予鈴が鳴ったからだ。

生徒達は嫌々ながらも席に着いた。

その日は何も変わらなかったことはなかった。

ただ授業を受ける。そして先生に哀れまれて、慰めの言葉を毎時間聞いた。昼食は持ってきたパンを席で食べた。何人かに誘われたが、アカは断った。午後は体育。アカは見学した(させられた)。何人かの生徒に羨ましがられた。アカは何も言わなかった。

そして放課後、クラスの大体の人が部活へと急いだ。

残ったのは授業中手紙を回している、ハデでうるさい人達。それと、大人しく本を読んでいる人。宿題をさせられているバカ2人組み(両方男)。それと、アカの合計7人。

うるさい人達は「今日はどこ行く?」とか「ねえねえ、A組の松田君、カツコよくない?」とか、雑談をして宿題をしている人達を邪魔している。

そして、そのうるさい人達がアカの方へやってきた。アカは足音をする方へ顔を向けた。

クスクスと馬鹿にするような笑い声が聞こえる。

「黒川さんはあ、どうして目が見えなくなっちゃったのお?」金髪のリーダー的な人が言う。

「事故で見えなくなっただよ」

「えつ、それじゃあドラマとか人の顔とかも見えないんだ？」
また別の人が。

「当たり前でしょ。あなたたちバカ？」

「ちよつと、それはないんじゃないの？」
またまた別の人が。ちよつと（？）怒ってるようだ。

「ああそれはよかつたわね」

アカは無視してカバンの中から本を取り出そうとした。

その時金髪の人がアカのカバンを奪った。

「ちよつと、目が見えないからって誰にでも優しくしてもらえ
ると思ってるの??」

その大きな声に、他の3人もこちらに注目した。

アカはその声に向かってハッと笑った。

その行動にその場にいた全員が感じたもの、それは恐怖。なんと
もいえない恐怖が背中を駆け巡った。

「別にそんなこと思ってないわ。わたしの目が見えても、わたし
はこの性格でしようね」

アカがクスクス笑う。

まるで、巢にかかった獲物を見る蜘蛛のように。ウサギを目前に
した猛獣のように。

アカ以外の人間の背筋を寒気が襲った。

さっきまで威勢よく悪口を言っていた人達からは、もう笑っては
いない。

「ちよ……ヤバイよコイツ……」
グループのリーダー
が耳打ちをする。

「ねつ、ねえ、もう行こ？」

「うん……っ」

3人組は逃げるように教室から姿を消した。

後に残ったほか3人は、まだアカを見つめている。

アカには見えないが、その表情は空気の重さから読み取れた。

プリントに書き込むシャーペンの音さえも聞こえず、ついに沈黙に耐え切れなくなったアカが口を開く。

「どうしたの？ 自分の事をやってもらってもいいのよ？」

全員がごくりと唾を飲む。

窓も開いていないのに、カーテンがゆらゆらと揺れた。そして、宿題組のしていたプリントが何の前触れもなく落ちた。

そのことに関しては、誰も驚かなかった。それよりも、この異様な空気。妖気とでも言うのか、まるでアカに何かがとりついているようだ。

「なあ、黒川」

落ちたプリントを拾いながら男子が言う。

「今の、なんだ？」

「今のって？」

「さっきの変な空気」

「わたしには分からないわ。ただあなたたちが勝手に感じてるだけでしょ？ 単なる被害妄想よ」

「そ、そうなのか？」

「だから分からないわよ。何回言わせるの？」

「わ・・・わるい」

男子の口は閉じた。

アカはフンツと言って顔をそらせ、カバンを持って教室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6092i/>

真っ赤な蝶のご主人様

2010年10月22日00時14分発行